

## 2019年3月 マニプールコロニーワークキャンプ



【活動日程】 2月28日～3月12日

【活動場所】 インドウエストベンガル州プルリア地方マニプールハンセン病コロニー

【参加者（日本）】 計6人

八木咲良（筑波大学2年）、小川真穂（立教大学4年）

國久茜里（筑波大学2年）、巖眞理央（筑波大学1年）

山本一葉（筑波大学1年）、大和田理史（筑波大学院1年）

【活動報告】

《ワークプロジェクト》

《概要》 独居老人棟の屋根や壁の修理を行った。

《目的》 雨漏りや水の浸水が度々発生している当該施設の修繕を行うことで、生活の質を向上させ、心身の健康に寄与すること。

《成果》 屋根や壁のヒビや穴が塞がれ、雨漏りがなくなり、安心して生活ができるようになった。



Before) 独居老人棟の屋上部分



After) ワーク後の屋上の様子



村人と共にワーク作業を行うキャンパー

《リサーチプロジェクト》

《概要》①村人の被差別意識、ハンセン病コロニーに対する心境の調査

②60歳以上のハンセン病回復者への差別に関する調査

上記2点を実施した。

《目的》ハンセン病コロニーの人々の現状（差別の現状、被差別意識、自助意識など）を正確に把握することで今後の活動に役立てるため。

《成果》①「ハンセン病コロニー出身であることにマイナスイメージを抱かない」

「村のために何かしようと心がける」という質問項目に対して90%以上がYESと回答した。このことにより村人はハンセン病コロニーの自己肯定感は悪くないことが判明した。

②第一世代と呼ばれる60歳以上のハンセン病回復者の方においては「被差別意識」を強く持っており、それが原因で村外の人と交流を持つことが難しいと考えていた。しかし、結果として「被差別意識」が原因となって村外の人との交流を妨げているというよりは、後遺症による身体の不自由が原因でそもそも村の外に行くのが困難であるということが判明した。



リサーチの様子



話を聞かせてくれた回復者の方と共に

#### 《絵本プロジェクト》

《概要》村内の小学校で子供達を対象に「やまからにげてきた・ごみをぽいぽい」「おおきなかぶ」のベンガル語訳したものの読み聞かせを行い、それらを聞いた感想文・絵をそれぞれ描いてもらった。また、キャンプの期間中、キャンパー1人につき、3回以上個別での読み聞かせを行った。

《目的》持参した日本の絵本を子供たちが楽しんで聞いてくれることが第一の目的であった。一方で、ゴミのポイ捨てはいけないという内容の絵本を読み聞かせることで、子供達が自分たちの生活を振り返り「ゴミをポイ捨てしないでおう」「まだ使えるものは使い続け、ゴミの量を減らそう」と考えてもらうことも目指した。

《成果》子供達は絵本の朗読をしっかりと聞いてくれ、「ウォーリーをさがせ！」など、子供達が本に群がって楽しむ様子も見られた。また「どうしてゴミをポイ捨てしちゃいけないのかな？」と一緒に考えることも出来た。



絵本の読み聞かせ後に絵を描いている子



絵本読み聞かせの様子

#### 《エンタメプロジェクト》

《概要》コロニー内でダンスパーティーを開催し、村人との交流を図った。

《目的》ハンセン病コロニーに日本人がきていることで村外の人々がハンセン病コロニーについて知ってもらう機会を作ること。

《成果》学校の試験期間と日程が重なってしまったため、例年通りの規模のパーティーは開催できなかった。しかし独居老人棟の前で実施したため、足が悪くて例年は参加できていないおじいちゃんおばあちゃんも参加することができた。



パーティーのためサリーを着ている村人



パーティー前の村人と

#### 《Old age homeパーティープロジェクト》

《概要》日本人キャンパーが企画したゲームや日本のお菓子を通じて、Old Age Homeに住む20人の回復者の方と交流をした。

《目的》他の世代に比べて後遺症が大きく、被差別意識が回復者の方々と楽しい時間を過ごすこと、また外国人である我々日本人とともに過ごすことで、最終的には被差別意識の軽減に繋がることを目指す。

《成果》ジェスチャーゲームや爆弾ゲームといった3種類のゲームや、鈴カステラなどの日本のお菓子を回復者の方々と楽しむことができた。またこのパーティー以降、回復者の人々から声をかけてもらうようになるなど、自然な交流が増えた。



独居老人棟の村人とキャンパー



独居老人棟の村人とキャンパー